

【主題】 学びを創造する金明っ子の育成

【副題】 学びを委ねることで、児童一人ひとりが「自律した学びて」になることを目指して

【学校・団体名】 石川県加賀市立金明小学校

【役職名・氏名】 校長 松原 清美

1. はじめに

10年後の社会はどのように変化しているのか、予測することが困難な時代である。そのような中、人生100年時代を生きていく子どもたちが自らの人生を切り拓くためには、一人ひとりが粘り強く学び続ける力や自己の学びで未来を創る力を身につけること、つまり「自律した学びて」になることが求められる。そのため、目の前の課題に対して思考し、その解決に向けた過程を自己調整しながら、意欲をもち最後まで取り組む子どもたちを育成したいと考えた。

そこで、学校教育においては「何を学ぶか」だけではなく、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」がさらに重要となり、知識を伝える授業から、子どもたちが主体的に学ぶ授業、自己調整ができる授業へと、学びを転換していかなければならない。

本校がある石川県加賀市の教育ビジョン「BE THE PLAYER 自分で考え 動く 生み出す そして社会を変える」を受けて、本校の学校教育目標は「自ら学び、判断し、行動する金明っ子の育成」とした。授業においては、学びを創造できる子を目指し、児童に学びを委ねることで「自律した学びて」となるよう、授業実践に取り組むこととした。

2. 「自律した学びて」の姿の明確化と実践

(1) 目指す「自律した学びて」の姿の設定と共有

一昨年度、学びを委ねている場面に授業参観で行った時に、保護者からの不信感を抱いた言葉があった。保護者だけではなく、教師自身も今まで経験したことのない授業であるため、「自律した学びて」とはどのような姿なのか、この学びで児童にどのような力がつくのか、どのような学び方をするのか、明確な姿を示す必要があると感じた。そこで、「自律した学びて」を「みんながみんな学びの主人公」という児童にもわかりやすい言葉で示し、具体的な姿を段階に合わせて設定した。(右上の表) この姿はすべての児童がすぐに達成を目指すということではなく、発達段階に応じて6年間でつけていく力や学び方を示すものとした。

みんながみんな学びの主人公

- ① **集中して勉強しよう！**
 - ・課題をつかむ力
 - ・最後まで取り組む力
- ② **学び方を決めましょう！**
 - ・なにを？ ・なにで？
 - ・だれと？ ・どこで？
- ③ **友達と話し合いましょう！**
 - ・学びが深まる 😊
 - ・学びが広がる 😊
- ④ **次につながる振り返りをしよう！**
 - ・よかったところは？ 直したらいいところは？
 - ・次はどんな学び方がいいのかな？

この「自律した学びて」の姿を、教職員で、さらに児童、保護者と共有することが大切である。初めに、校内研修会において全教職員でこの姿を共有した。特に、発達段階に合わせたつけたい力や学び方を確認した。例えば、低学年では「①集中して勉強しよう！」ができるようにしていくこと、中学年では「②学び方を決めましょう！」という自己選択ができるようにしていくことであるが、低学年においても②や③、④にチャレンジしていくことも可能であり、少しずつ経験しながら卒業時にはすべてができる児童の学びにしていくことを共通理解した。

次に、全校集会で児童との共有の場面を設け、どのような学びをしていくとよいのか、全校児童と研究主任が対話しながら進めた。児童は、意欲をもって学んでいくことが大切であると確認していた。

さらに、「自律した学びて」を育てるために、どのような授業を進めていくのか、育友会総会時に保護者へ伝えた。加賀市の教育ビジョンの意味、教育が目指す方向性を、加賀市教育委員会プロジェクトマネージャーから説明をしてもらい、全小中学校が取り組んでいることも周知した。その後、本校研究主任が児童につけたい力と現在取り組んでいることを説明した。保護者が委ねる学びへの理解が進むことができ、その後の授業実践がしやすくなってきている。

(2) 「自律した学びて」を育てる委ねる学びの実践

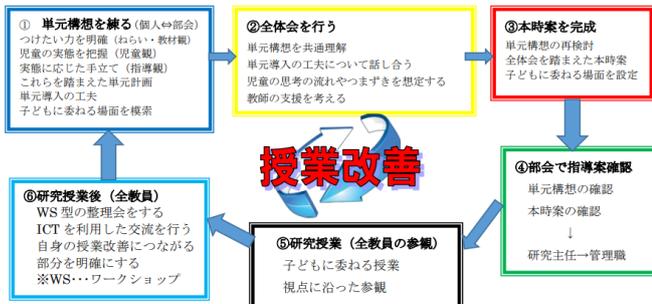
「自律した学びて」を育てるためには、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることが大切である。児童が学習を自己調整しながら異なる考え方

が組み合わせりよりよい学びを生み出すようにしたい。

そこで、本校では算数科を中心として、児童自身が考え、学びを調整できるよう、委ねる学びの授業実践を行っている。児童を信じて学びを委ねる授業であるが、決まった型はなく、目の前の児童を把握しながらどのように委ねると良いのか、児童の学びをどのように見取ると良いのか、教師は悩むことが多い。そのため年度の始めに、研究主任が提案授業を行い、その実践をもとに校内研修会で対話型のグループ協議を行った。今年度は、山形大学鈴木貴子先生をお招きし、グループ協議のファシリテートしていただいた。参観の視点を基に、教師が考えを表出し合うことで、授業づくりが自分事となり、授業実践に挑戦してみたいという気持ちを生んでいる。年間7本の研究授業を行うにあたり、全教職員で授業を考え、授業参観した上で校内研修において表出することを繰り返し行いながら、日々の授業を変えていけるようにしている。

(3) 指導力を継続的・組織的に高める指導体制

上記で示したように、授業改善における委ねる学びについては、日々の授業でやってみることが大切である。教師が失敗を恐れずに何度も繰り返しながら少しずつ工夫することで、児童の学びが変化していく手ごたえを感じていくようにしたい。そのため、学校全体で指導体制を整え、他から学ぶ場を多く設けている。下の図は、本校の授業改善のサイクルである。このサイクルを何度も回すことで、教師一人年間1回の研究授業を行うこととともに、他者の授業から学び、日々の授業に生かしていくこととしている。次の校内研修では、その内容をどのように取り組んだか、どのように工夫したか、うまくいった点とうまくいかなかった点を他の教師と話し合い、次の取り組みへ進ませる雰囲気をつくっている。



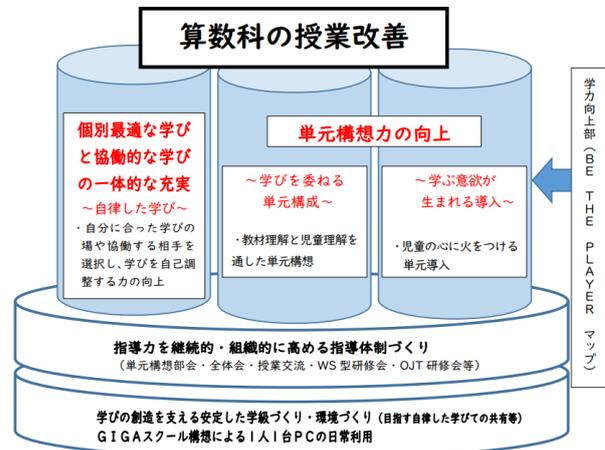
また、加賀市教育委員会のプロジェクトマネージャーや指導主事を要請し、単元の構想から伴走してもらっている。単元構想づくりから、委ねる場面、児童理解の仕方や見取り、児童に合わせた環境づくりなど、

教師の悩みを聞きながら一緒に考えてくれる存在であることが、教師の授業実践へのさらなる意欲づけとなっている。

時には、教師の学びたいという意欲を聞き、市内小中学校の校内研修会などと繋ぐことで、他校の実践から学んだことを自己の授業づくりに取り入れている姿がある。そして、職員室では、教師が互いの単元や教材について話し合い、相談し合う様子も見られる。このように学び合いながら、自走できる教師を目指している。

3. 目標達成に向けての重点取組

昨年度の取組の成果と課題を踏まえ、今年度は「単元構想力の向上」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の2つに絞り、研究を推進している。



(1) 単元構想力の向上

①教材理解と児童理解を通した単元構想

教科における単元でつけたい力を明確に把握するため、単元構想シートを作成している。1時間ごとの授業を考えるのではなく、単元を通して児童に力をつけていけるように計画している。その時に最も大切で、意識しなければならないのは、目の前にいる児童の理解である。委ねる授業に取り組むほど、児童理解の重要性を実感している。児童理解には、大きく分けて3つに分類できると考えた。教科における児童理解、児童それぞれの特性や人間関係の児童理解、そして授業の中での児童理解である。教師自身が3つの児童理解を意識した授業を行うことで、児童のつまづきに気づいたり、様々な考えに触れさせるために児童同士をつないだりすることができるようになってきた。また、その児童理解をもとに、児童自ら解決に向かうためのヒントカードや具体物などを児童一人ひとりの学びを

イメージしながら準備している。

研究授業においては、「レディネステストで見取った児童の姿とそれに対する支援」「児童の特性と個人の人間関係とのつながり」「児童の学びの把握」の3つの視点で協議している。児童の姿から教師が学び、評価を行っている。

カード、課題の種類、一人で友達と、など)を教師が整えている。時には、困っていることを表現できない児童がいることも理解し、教師がその児童へのアプローチや関わり、他の児童と繋げることを意識している。一人ひとりを伸ばし、誰ひとり取り残さないように環境設定を考え、準備している。

金明小学校 単元構想シート 5年 算数科 単元名「合同な図形」 全 8 時			
(1)単元の目標 (育成したい資質・能力)			
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等	
①図形の形や大きさが決まる要素について理解している。 ②図形の合同について理解している。 ③合同な図形では、対応する辺の長さ、対応する角の大きさがそれぞれ等しいことを理解している。 ④二つの合同な図形について、ずらしたり、回したり、裏返したりして置かれた場合でも、その位置に関係なく、辺と角の対応を付けることができる。 ⑤合同な三角形の辺の長さ、対応する角の大きさに着目し、作図することができる。	①図形が「決まる」という意味を理解し、合同な三角形について、簡単なかき方を考え、合同な三角形をかき出すための必要な構成要素を見出している。	①図形の形や大きさが決まる要素について考えたことを振り返り、そのよさを生かす。学習したことを生活や学習に活用しようとしている。	
(2)児童の実態		②単元導入の工夫	
レディネステストより、平均が「10」であることや、平行線が他の直線と等しい角度で交わることを用いて、角度を求めることとおおむねできている。また、分度器を用いて三角形をかくこともおこなわれている。一方で、「合同」の意味は正確に捉えられておらず、誤答より「形が同じであれば、合同な図形」と捉えている児童が一定数いるといえる。		第1時に「ピタリゲーム」と称して、子どもの興味関心を引き出しながら、具体物を操作することで「合同」の意味についての理解を深める。また、第1時に単元の総論で取り扱う作図にも取り組ませることで、単元のゴールに身に付ける方を意識させる。	
(3)単元計画 指導に生かす評価①～③ 記録に残す評価④～⑧			
単元計画	評価	キーワード	単元
1 図形の構成要素や図形間の関係に着目し、「合同」の意味を理解する	知+技①④	合同 びつたり重ね合わせる	一斉
2 合同な図形の「対応する」構成要素に着目し、合同な図形の性質を理解する	知+技③	対応する辺 対応する角 対応する頂点	○
3 四角形を対角線で分割してできる三角形どうしの関係に着目し、既習の四角形を合同な観点で捉え直す ※Happy問題	知+技②	対角線	○
4 三角形の構成要素に着目し、合同な三角形のかき方を考える	思+判+表①	辺の長さ 角の大きさ	○
5 三角形の構成要素に着目し、合同な三角形をかき出す ※Happy問題	知+技⑤ 学び①	前時と同様	○
6 合同な三角形のかき方を基にして、合同な四角形のかき方を考える	知+技⑥	前時と同様	○
7 学習内容の習熟および定着を図り、数学的な見方・考え方を振り返る	知+技⑦⑧ 思+判+表②	これまでのキーワード	○
8 単元テストを行う	知+技⑧⑨ 思+判+表③	これまでのキーワード	○



②次に生かす学び方の振り返り

授業の終わりに、学習の振り返りを行っている。振り返りをする中で、児童自身が自己の学び方をフィードバックすることができ、次へのよりよい学びにつながるかと考える。どのような学び方をしたのか、次時はどのような学び方をするといいのか、児童が自分の言葉で記録に残していけるようにした。発達段階に応じて、PCに入力する学年や教科もあれば、ワークシートに書き込む学年もある。振り返ることで、自分の学び方をメタ認知することができ、次の学び方につながる姿も見られる。

(児童の振り返り)

今日も一人でやりました。「数直線を見なくてもできるようにしたい」が今日の自分のめあてでした。さいしょは数直線を見ないとできない感じだったけど、数直線を見ているとだんだんおぼえてきて、数直線を見なくてもできました。めあてをたっせいでできてよかったです。(3年)

今日は、⑤までいき、教室で一人でした。今日もつきたい力は、昨日と同じの(1)で、今回は、「やり方を理解し、計算する」というキーワードを意識してすることができました。とにかく、やり方をどう覚えるかや、そのやり方の簡単な方法などはないかな?と考えたりしているうちに、プリントなどで、計算ができたので、時間を有効活用できました。また、今日は、問題に動画を撮るという勉強がありました。その時に、カメラワークが見やすいようにできたし、相手に聞かえるように、ゆっくり、ていねいに、大きな声でできたので、よかったです。算数面でも相手と話すときのこつを日頃から意識してやっていきたいです。(6年)

今日は、⑧の①を少しやるまでできました。とても難しい問題だったけど、わからない人で集まっていたら〇〇さんがわかっていたので、聞いてみたら意味がわかりました。それを〇〇さんに教えることもできました。できるところは自力でできたし、考えて動くことができました。これからも続けていきたいです。(6年)

(単元構想シート)

②児童の心に火をつける単元導入

児童が課題意識をもち学びを自分事とするためには、児童の「できるようにになりたい、もっとわかりたい、なぜかな、解決したい」という思いを引き出し、児童がこの単元で学びたい単元導入を行うことが大切である。そのためには、児童の心に火をつけるような単元導入を工夫することとした。また、単元での学びを見通すことで、意欲の継続も期待できると考えるため、教師と児童が単元の見通しを共有し、児童が単元のゴールにはどのような力がつくのか理解できるようにしている。

(2) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

①自分に合った学びを自己調整できる環境設定



委ねる学びとは、児童が課題に対してどのように解決するとよいのか考え、学習のプロセスを自分で決めて取り組んでいく学びである。児童が自分にとって良い学びとなるよう、学び方(何を、何で、誰と、どこで)を自己決定し、様々な子と関わりながら学びを進めることの良さを感じ取れるようにしている。そのため、児童が学びを自己調整できる環境(学ぶ場所、デジタルかアナログか、複数のレベルに合わせたヒント

4. 児童の姿から見る学びの変容

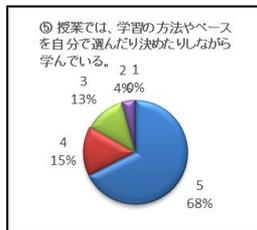
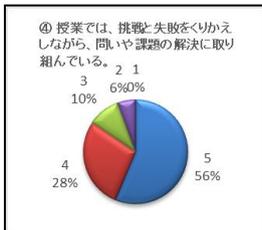
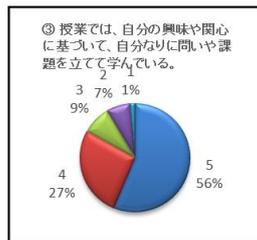
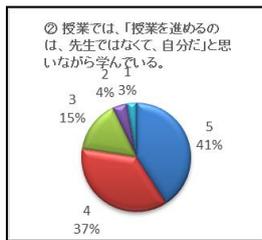
学びを委ねることで児童が「自律した学びで」に近づいたかどうかは、児童の姿から評価する。そのため、実際の児童の姿、児童のアンケートや調査の結果から変容を分析していく。また、教師の実践での変容と保護者の声もしっかりと受けとめ、今までの取組による学びの変容を把握する。

(1) 児童の学び方の変容

委ねる学びを繰り返し授業実践したことで、児童は

学びに対する意欲が高まってきているとともに、自己調整しながら学ぶ意欲が継続できるようになってきている。特に、単元を通した学びを教師が工夫することで、児童が既習やヒントカード等を活用し、友達と協働しながら、粘り強く解決する姿が見られた。また、学び方の振り返りを積み上げることで、より良い学び方を考えられるようになってきた。昨年度から加賀市が取り入れている「もっと自分らしく学ぶためのアンケート(ScTN)」においても、実践の結果が数値として表れている。

5:いつもそうだ 4:だいたいそうだ 3:ときどきそうだ
2:あまりない 1:まったくない



学力調査を分析すると、6年生の解答では記述する問題への無回答率が低くなってきていることがわかる。授業の中で児童同士で、または教師にわけを問い返され、考えを表出する場面を設けてきたことが、児童の表現への意欲や文章表現力を高めたと考えられる。

また、児童が委ねる学びで得たことを生かして、自主的な活動においても意欲的な姿が見られるようになり、自分たちで考え、取り組んでいる。児童会の金明っ子会議において出された「全校児童が仲良くなるには」等の課題を解決するための取組を企画し、運営から振り返りまでを自分たちで行っている。教師は見守る存在であり、児童自身が学校をより良くしたいという主体となって行動している。



(2) 学校評価アンケート(保護者)から見る変容

保護者は子どもたちの家庭での言動から学校の取組を評価している。学校評価アンケートのコメントを見ると、保護者が児童の自主的に学ぶ姿を感じ取っており、教育活動を肯定的に受け止めていると考えられる。

授業のやり方について、子供達が主体的に取り組めているように感じるので良いと思います。言わないでも自分から宿題ができるようになりました。

自分から勉強をやりたいと言う姿に驚き、当たり前のことだが、私が言わなくても宿題は自ら率先してやっている姿に偉いなぁと感じ。

参観日で今の授業の取り組み方を拝見し、私が昔学校で学んでいた授業と、今加賀市が進めるBe The Playerでの授業の受け方の違いに驚きました。これならのびのびと自由に自ら進んで学べるなぁと思った反面、個々の差が大きく出るんじゃないかな、と少し不安に思う気もしました。

子どもたちが学校生活をより良くする工夫を会議で話し合い、それをきちんと先生たちが受け入れてくれる姿勢が、とても素敵だと思いました。昔は学校が何でも決めるのが当たり前。これからは子どもたち自身が自ら考え、取り組んでいくという流れを、学校はきちんと実践してくれているんだなと感じました。どんどん個々の考える力を養ってほしいです。

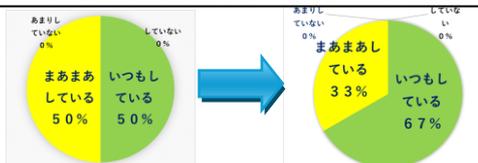
〈保護者アンケート〉

上記に示すように、保護者の声から出る心配な意見としては、個別最適な学びが個々の学びに差を生んでしまい、力がつかないのではないかとという点である。これからの実践で、誰ひとり取り残さないことや力の伸びる児童への手立て・環境設定等に取り組む、その姿を保護者にも示していくことが大切であると考える。

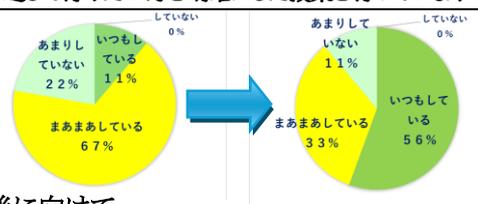
(3) 委ねる学びに取り組んだ教師の変容

どのように取り組んだらいいのか悩んでいた教師も、学校全体が委ねる学びに挑戦していること、さらに児童の学びへの姿勢が変わってきたことを実感し、授業実践に取り組む、積み重ねてきている。その変化は毎月の教職員の学力向上チェックシートの数値からも読み取れる。(昨年度1学期と2学期の比較)

児童に合った委ねる学びの場を設定しましたか。



単元を通して付けたい力を明確にした授業を行っていますか。



5. 今後に向けて

児童が学びを自分事として考え、創造していけるように、委ねる学びをどの場面で設定するとよいか考えながら、取り組んでいる。しかし、今の取組を継続するだけでは、児童が「自律した学び」とはならない。

教師自身が「自律した学び」となり、他校や他者から学びながら自分の引き出しを増やし、その中から児童の学びとして最善の方法を選ぶこと、失敗をおそれずにチャレンジしていくことである。うまくいかなかった時は、もう一度、児童理解や単元構想に立ち戻り、改善しながら前進していくことである。児童と教師が伴走しながら、学びを創る学校を目指す。